

宮城から、伝えたいこと。

資料3

Baton~

特集

できるひとが
できることを。

つながれ、どこまでも

バトン
VOL.
10

FROM MIYAGI

きて・みて

【語り部】気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(気仙沼市)

【伝承施設】石巻市震災遺構大川小学校(石巻市)
東日本大震災遺構 旧女川交番(女川町)



あしたのクリエイティブ アイリスオーヤマ株式会社の「低温製法米」

バトン

とは 世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

できるひとことが できるひととが。



特集テーマ

災害と多様な視点

災害から立ち上がるとき、

「男性だから」「女性だから」「若者だから」

「高齢だから」「住民だから」「よそ者だから」で

できる・できないを判断するのではなく、

「わたし」ができること・大切だと思うことをする。

性差や立場に関係なく多様な動きが生まれることが、

復興の後押しになり、

豊かな未来づくりにつながるはずです。

災害が起きたとき、まず感じるのは無力感。想像もしていなかつた被害に直面すると、何もできない自分、備えをしていなかつた自分を責めたくなるものです。また、被災をしていない場合でも、現地の人をどうサポートするといいのか、自分にできるのかなど、迷いが生じる方も多いと思います。

しかし、誰にでも、少しづつでもできることがあります。大切なのは、そこに多様な視点があること。復旧や復興に向けて方針をまとめていくことは必要ですが、その地域をよく知る人、外からの視点で俯瞰して見られる人、これからも暮らし続ける人、新しく暮らし始める人など、様々な立場でそれぞれにできることを考え、行動していくことも地域の未来にとって大切なことです。

今回は、2019年の東日本豪雨をきっかけに自伐型林業を実践し山と地域を守る活動を行っているWoods&People MARUMORI代表の刈田路代さんと、東日本大震災後にボランティアで南三陸町を訪れて以来、まちづくりや全国各地の被災地支援など多方面で活動を行う大場黎亞さん、活動のきっかけや続ける理由をお聞きました。

山を守ることは持続可能な暮らしの第一歩。



刈田路代さん(写真右)は仙台市生まれ。画家として活動する一方で障害者支援NPO法人で働き、夫と共に古本店「スローパック」も運営。丸森町生まれの齋藤百合子さん(左)と。

さっかけ
2019年9月の東日本豪雨(台風19号)で全国最大の被害を受けた自治体、丸森町。

大雨は阿武隈川支流の堤防決壊や土石流を誘引し、町役場も内水氾濫によって孤立しました。死者・行方不明者11人以上ったその爪痕は今も人々の暮らしや風景に残ります。

この被災をきっかけに誕生したのが任意団体 Woods & People MARUMORI(通称ウッピー)です。テーマは「森と人との関係を結び直す」。

代表の刈田路代さんは「山の力を保つ担い手を増やすこと、

それが生業となることをめざし、自伐型林業を実践してい

ても活躍します。

丸森の風土に魅入られて移住した刈田さん。山仕事とは無縁でしたが、夫と共に被災現場を歩いて荒れた山を目の当たりにしたことが転機となりました。そもそもここ阿武隈山地一帯の地質は風化やすい真砂土(花崗岩)。太古から崩落を繰り返しながら地形を更新してきた一方で、戦後は樹木を皆伐して売り、再び植林するという山林政策がとられました。それは経済的利益を一時的にもたらす半面、土壤の保水力をさまたげ、山の価値を弱めてしまったのではないか――。

山林保全と安全な暮らしは表裏一体

実は丸森は2000年代に重要な災害を経験しています。豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

設立までの出来事



2022	2019	2011	2009	2002
Woods&People MARUMORI設立	東日本豪雨(台風19号)、3月12日夜半からの大雨で町内各所に被害	東日本大震災。町内では放射能汚染により農産物出荷に制限がかかる	刈田さん 丸森に移住	丸森町廻倉地区で大規模山林火災



齋藤さんがショベルカーを操り、刈田さんが丸太を切る。この丸太はオーブンジャパンが自らの実習用にも購入してくれた。「とにかく安全第一」と刈田さん。

景があります。それは70代の男性がチェーンソーを担いでさつそうと現場へ向かう場面。自信と誇りに満ち、これこそが持続可能な暮らしの象徴だと気づかされました。ウッピーで広報などを担当する斎藤百合子さんは別の体験からそれに共感を抱きました。「豪雨で屋敷脇の道路が崩れて通れなくなったり、災害支援団体のオープンジャパンがあつという間に重機で土砂をどけてくれたんです。その後、ボランティアを通じ、公道から玄関先まで道をつけることは復旧の第一歩であることや、道は被災した人の希望の光につながるなど、重機の重要性

を感じ、自分でもそんな道を通しての人になりたくて重機の免許を取りました。そして同時に山の在り方を考えるようになり、山主である父から所有林5・7ヘクタールを提供してもらい、ウッピーの研修林「親林」としました。

斎藤百合子さんは別の体験からそれに共感を抱きました。「豪雨で屋敷脇の道路が崩れて通れなくなったり、災害支援団体のオープンジャパンがあつという間に重機で土砂をどけてくれたんです。その後、ボランティアを通じ、公道から玄関先まで道をつけることは復旧の第一歩であることや、道は被災した人の希望の光につながるなど、重機の重要性

を感じ、自分でもそんな道を通しての人になりたくて重機の免許を取りました。そして同時に山の在り方を考えるようになり、山主である父から所有林5・7ヘクタールを提供してもらい、ウッピーの研修林「親林」としました。

作業道を切り開く



学び



研修林での実践は、徳島県の自伐林家・橋本光治さんの指導を受けての作業道づくりがメイン。ショベルカーや林内作業車を入れる程度の幅2メートルの道を高密度で開きます。これは山の傷みを抑え、かつ大雨が降っても崩落しない、災害を食い止める知恵と知識、技術あってのもの。微妙な沢筋を読み取り、雨水が通りの「水道」と直角に交差するよう作業道を付けるのがポイントです。

橋本さんが見本で作つてくださった作業道は、沢音が軽やかで心地いいものになつたとか。「地形を読み取るのが難しく

「宮城県みんなの森林づくりプロジェクト推進事業」の補助金を充てています。

仲間と共に技術を習得し、組む人を一人でも増やすのがウッピーの目標です。そこにはこの研修林と私の夫の10ha

自伐型林業に生業として取り組む人を一人でも増やすのがウッピーの目標です。そこにはこの研修林と私の夫の10ha

の所有林を合わせて、杉だけではなく広葉樹も育つ針広混交林としたいと考えています。

私たちの取り組みは「ハチドリの一滴」かもしれないけれど、一歩ずつ前に進んでいます。

共感してくれる仲間を増やす手始めとして、だれでも参加できる体験研修会や、子どもたちを対象としたワーキングトップを開催するなど、山の大切さを伝えています。



自伐型林業の先駆者である橋本光治さん指導のもと、作業道は少しづつ延長している。木漏れ日が美しい休憩中のひとこま。

生業の創出へ



これまでの展望

会員十数名のうち実作業ができるメンバーは6~7名。それぞれが災害支援やツリーケーリングなどのエキスペリエンスで「小型車両系建設機械3t未満」の免許を所持します。重機の購入や燃料代には

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

刈田さんは自宅近くの土砂崩れ現場で忘れない光

重要なものには、豪雨で土石流が多発した廃倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壤が乾燥し、後に植えた木も根が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が十分に張りません。保水力が弱くなったり崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られています」と刈田さんはまつ毛で語ります。

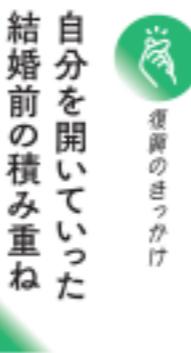
南三陸町に
通いながら見つけた
自分の役割

東日本大震災が起きた2011年。早稲田大学に通う学生だった大場黎亜さんは、ボランティアとして初めて南三陸町を訪れます。そこから定期的に東京と南三陸を行き来する生活を経て、結婚を機に南三陸町民に。その後、多角的な視点からまちづくり・ひとづくりを目指す株式会社Plot-dや、森づくりからひとづくり、まちづくりへとつなぐ一般社団法人東北GYROSを設立したほか、地域行事の実行委員や役員、協議会員なども幅広く務めています。今年からは、宮城県の農村漁村実業団体の一人目集落情報発信支援員の一人目



としても活動。「南三陸町で暮らすことになるなんて、当時の私は考えもしませんでした」と、振り返る大場さん。「でも違うようになつてからは、よそ者である自分の役割があると思いました」と言葉を加えます。「ただまちに溶け込もうとするだけじゃなく、外から来た私だからこそ見る視点を持つことや多様な立場を理解することが役割だと思つて。防災でも、まちづくりでも、山との関わり方でもそう。いろんな立場の人があるからこそみんなで考えよう」ということはいつも意識しています」。

自分を開いていった
結婚前の積み重ね



2017年に南三陸町出身のご主人と結婚。しかし町民になるのに2年近く待つてもらつたそう。「ボランティアのれいあちゃん」で見せて貰った自分は、何でも地域のためにやれることをやるスタンスだつたけど、町民になるならこの地で「自分のため」も意識して生きていく必要があると思った」と話す大場さん。結婚しても、全国を飛び回るような仕事や災害ボランティア、新たな挑戦などをできるだけやっていきたいという自分が生き方を受け入れてもらうために、地域行事に参加したり交流したりと、それまで以上に自分自身を知つてもらう時間をたくさんつくったそうです。

また、結婚後すぐに地域にある神社の氏子青年会の一旦になつたり、まちづくり協議になつたり、まちづくり協議

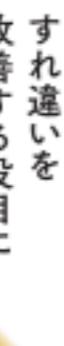
会の役員になつたりと、積極的に地域の取り組みに入つていきました。「一方的に私のやりたいことを伝えるより、まずは皆さんに苦労しながらも大事にしている場に飛び込んで共に活動しながら、私はこう思うよ。こんなことができるよ」と自分を聞いていました。そこに丁寧に時間をかけてきたからこそ、今では地域の方から理解していただき、頼つていただけたり、私のやりたいことをバックアップしていただけたような關係を築くことができました」。

3.11後の出来事



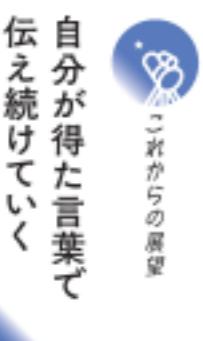
現地でのボランティア活動だけではなく、現地で頑張る方々や長期ボランティアたちのファンローも大事にしています。ボランティア運営にストレスを感じていないか、負荷がかかるすぎている人がいないか、大場さんは関係者の中で生じるすれ違いを放つておくことなく、時に間に立ち、また時にはサポート役を担いながら被災地支援が円滑に進むことに力を注ぎます。

改善する役目に



自分が得た言葉で
伝え続けていく

自分が得た言葉で
伝え続けていく



A candid photograph of a man and a woman laughing together. The woman, on the left, has long dark hair and is wearing a black t-shirt with a graphic print of multiple faces. She is covering her mouth with her hand as she laughs. The man, on the right, has short grey hair and is wearing a dark blue polo shirt. He is also laughing. They are indoors, with large windows and vertical blinds visible in the background.

が、それでも山と向き合うようになつて、自然災害との向き合いの方も変わつていったように思います」と話します。

一方で、次世代へのバトンの渡し方が課題と言います。「震災後、私はたくさんの方々との出会いと経験のおかげで視野が広がりました。このバトンを次世代に、重荷にならないよう渡したい。自分もまだ頑張りながら、しっかりと次世代にこなす」といいます。

取材中にも地域の方から声をかけられていた大堀さん。偶然通りかかった、長い付き合いだという“たかちんさん”は、大堀さんのこれまでの活動を見て心酔していたひとり。

避難所には多様な人が集まります。高齢者や子ども、妊婦、障害のある方、外国人など、配慮が必要な人も少なくありません。そのような人たちがいることを理解し、それぞれができるところで避難所の運営に参画していくことが大切です。

監修 離き世代の女子防災プロジェクト代表 北村育美さん

✓避難所チェックシート

内閣府男女共同参画局が発行しているガイドライン「避難所チェックシート」を活用し、避難所での生活を考えてみましょう。

ポイント1

更衣室を作る際は、上からも見えないよう天井まで覆う

ポイント2

高齢者はトイレの近く、子連れ家族は畳の部屋など、要配慮者に応じたレイアウトにする

避難所チェックシート

確認日：_____ 確認者：_____

① 避難所のスペース

プライバシー	<input type="checkbox"/> 授乳室（椅子、授乳用の枕やクッション、おむつ替えスペース）がある <input type="checkbox"/> 男女別更衣室、男女別休憩スペースがある <input type="checkbox"/> 男女別更衣室、男女別休憩スペースが離れた場所にある <input type="checkbox"/> 開仕切り・パーティションがあり、その高さや大きさなどが、プライバシーの観点から、十分である
要配慮者	<input type="checkbox"/> 適切な通路が確保され、段差が解消されている <input type="checkbox"/> 乳幼児のいる家庭用エリアがある <input type="checkbox"/> 介護・介助が必要な人のためのエリアがある <input type="checkbox"/> 単身女性や女性のみの世帯用エリアがある <input type="checkbox"/> 女性専用スペース（女性用品の配置・女性相談）がある <input type="checkbox"/> キッズスペース（子供たちの遊び場・勉強・情報提供）や保育エリアがある <input type="checkbox"/> 足踏み悪い人のための道具（段ボールベッド等）が提供されている
トイレ	<input type="checkbox"/> 安全で行きやすい場所に設置されている <input type="checkbox"/> 女性トイレと男性トイレは離れた場所にある <input type="checkbox"/> 女性トイレ：女性用品・防犯ブザーの配置、仮設トイレは女性用を多め <input type="checkbox"/> 男性トイレ：尿取りパット等の配置 <input type="checkbox"/> 多目的トイレが設置されている <input type="checkbox"/> 洋式トイレが設置されている <input type="checkbox"/> 屋外トイレは猫がりにならない場所に設置されている <input type="checkbox"/> トイレの宿室内、トイレまでの経路に夜間照明が設置されている <input type="checkbox"/> トイレに扉がある
入浴施設	<input type="checkbox"/> 安全で可能な限りバリアフリーに対応した入浴施設がある <input type="checkbox"/> 男女混わざ一人で（又は付き添いを受けながら）入浴できる施設がある
安全	<input type="checkbox"/> 避難所の危険箇所や死角となる場所の把握・立入制限がされている <input type="checkbox"/> 開仕切り・パーティションが高い場合は個室の定期確認がされている
その他	<input type="checkbox"/> 各部屋に部屋札（ピクトグラム、やさしい日本語）が設置されている <input type="checkbox"/> 揃示板による情報提供（インターネットが使用できない人・情報が届きにくい人向け）がされている



「避難所チェックシート」

「災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン（内閣府男女共同参画局）」をもとに作成

自分が避難所運営できることを書き出してみよう

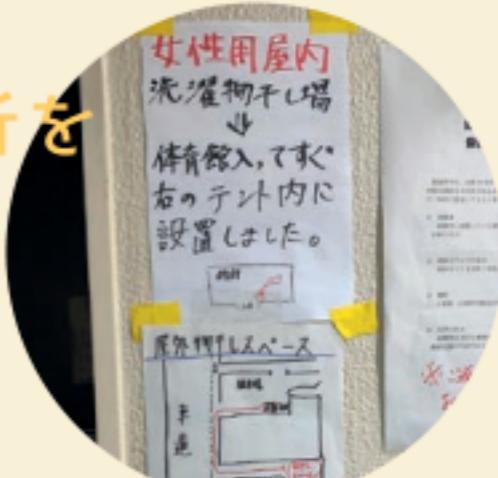
避難所生活に、女性視点の気づきを取り入れてみよう

避難所は災害から身を守る場所ですが、自宅が被災した場合は一時的な生活の場にもなります。

お互いが協力し合い、安心して生活するために、女性の視点で避難所生活のルールを考えてみましょう。

洗濯や干す場所を男女で分ける

人に見られたくない下着などもあるので、洗濯物を干すスペースは男女別にし、外から見えない配慮も忘れずに。洗濯機の台数に余裕があれば、洗濯機自体も男女で分けるとより安心です。



実際の避難所の様子（提供：北村育美さん）



交流スペースを設ける

情報交換や安否確認のためにも交流スペースは大切。食事ができるテーブルを置けば、単身者の孤独感も紓れます。男性の目を気にせずメイクをしたり、支援物資の下着を運んだりできる女性専用スペースを設けるのも手。



積極的に手伝いをする

勤ける人は積極的に避難所運営に関わるのがおすすめ。顔見知りも増え、役割があることで居場所もできます。その際は、負担に傷りがないよう「食事は女性の担当」と性別で役割を決めず、できることを手伝いましょう。



ほかにも

ほかにも、キッズスペースや授乳室、更衣室なども必要です。また、地域には、子どもがいるため遠慮したり、ペットがいて利用できなかったりと、避難所を運ばず壊れた自宅や車中で暮らす人もいます。避難所以外に避難している人にも目を向け、助け合いましょう。

施設①

カード □津波被害を知る □証言聞く
□避難を考える □復興を感じる

語り部紹介@気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館



佐藤さんは語り部を始めて半年。福岡さんは大谷中学1年時から始め、4年目になる。

佐藤さんは語り部を始めて半年。福岡さんは大谷中学1年時から始め、4年目になる。

福岡未央さん(右)
(16歳・高校1年生)気仙沼市
佐藤憂奈さん(左)
(16歳・高校1年生)気仙沼市

その企業は、東北で約30年続く農家である「株式会社舞台アグリイノベーション株式会社が設立されました」



多目的スペースも設けられた「大川震災伝承館」。
丁寧に聞き取った住民の声も更新型の展示として発信し続けている。

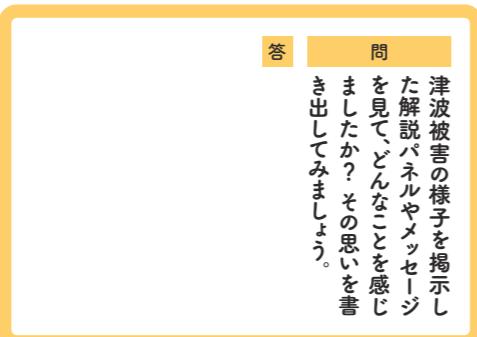
施設③

キーワード □津波被害を知る □証言を聞く
□復興を感じる □アートを見る

石巻市震災遺構大川小学校



DATA ◎宮城県石巻市釜谷字葦島94 ☎0225-24-6315 ◎震災遺構大川小学校 9:00~17:00 なし(大川震災伝承館は毎週水曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始、※特別閉館日あり) 入館料無料 https://www.ishinomakiikou.net/okawa/ (大川震災伝承館についてもこちら)



答 **問**
津波被害の様子を掲示した解説パネルやメッセージを見て、どんなことを感じましたか? その思いを書き出してみましょう。



〈右上〉敷地内に設けた解説パネルとメッセージ。メッセージはかつてあった穏やかな生活を想起させ、見る人の防災意識にスポットを当てる。〈右下〉校舎の教室棟と屋内運動場をつないでいた渡り廊下部分。渦を巻いたような津波が、柱ごとねじ倒したといふ。8.6mの津波に襲われた大川小学校。凸状に盛り上がった2階の床や波状痕が残る天井から、すさまじい津波の威力が伝わる。

施設②

キーワード □津波被害を知る □証言を聞く □避難を考える □復興を感じる □まちを感じる

東日本大震災遺構 旧女川交番

女川町の最大津波高は14.8m。引き抜かれた土の杭からも、津波の力の大きさがわかる。見守り保存のため、自然に生えてきた草木も手を加えない。



旧交番の屋根部分。紋章が付いていた形跡も。(2020年4月27日撮影)



この地域で震災前の地面が残るのはここだけ。かつての暮らしに想いを馳せられる場所である。(2020年4月27日撮影)



DATA ◎宮城県牡鹿郡女川町海岸通り1(女川町海岸広場内) ☎0225-54-3131(女川町産業振興課) なし 入場料無料 https://www.town.onagawa.miagi.jp/

遺構を囲むスロープの壁には、復興への歩みを紹介したパネル展示も。子どもから大人まで、一丸となって復興に取り組む町民の様子を伝える。



「**当時のまま**」を遺す意味

まちのメイン通りだった国道39号線沿いで、町民の安全を支えていた女川交番。鉄筋コンクリート造2階建てだった建物は、東日本大震

災の津波で海中に沈み、引き波によって基礎部分の杭が抜かれ横倒しなったと考えられています。建物を遣すにあたり女川町が選んだのは、震災で破壊されたものが年月を経てどう変化するかを見届ける「見守り保存」でした。復興に伴い周囲はかさ上げされましたが、スロープに囲まれた建物は地面も含めて当時のまま。がれきも流れ着いた状態で残され、津波の威力をリアルに伝えます。

答 **問**
屋根を付けたり補強したりせず、自然な状態で保存する方法を選んだのはなぜでしょうか。現地で感じたことを書き出してみましょう。

1階は執務室、2階は休憩室として使われていた。鉄筋コンクリートの建物が津波で倒壊・転倒した事例は世界的に珍しい。

きてみてマップ

見てみてで紹介した施設のほか、
特集・あしたのクリエイティブで紹介した場所も
記載しています。



宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています!
皆さまからの投稿も
お待ちしております!



LINE



Facebook



X(旧twitter)



Instagram